

かわどかまはちまん 川戸釜八幡遺跡

ゆにしがわ かわどたいら
- 日光市湯西川字川戸平地内 -

川戸釜八幡遺跡は、湯西川の段丘上にある山間の遺跡です。栃木県の北西部に位置し、5 kmほど北へ行くと福島県境となります。発掘調査は、国土交通省による湯西川ダム建設に先立ち、平成10～19年度に実施しました。

調査の結果、縄文時代後期から晩期（3,500～2,500年前）の^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡と^{せっかんぼ}石棺墓が地点を異にして発見されました。また、これらの遺構からは、^{ふかばち}深鉢・^{あさばち}浅鉢・^{つぼ}壺・^{ちゆうこう}注口などの多種多様な縄文土器のほか、^{せきぞく}石鏃・^{いしさじ}石匙・^{せきすい}石錐・^{すりいし}磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石などのたくさんの石器、土偶・耳飾り・^{せっけん}石棒・^{せっかん}石剣・石冠などの祭祀や儀礼用品が出土しています。

注目されるのは、中部地方から関東地方西部の山間部に発見例の多い石棺墓が18基確認されたこと、東北地方日本海側にしか産出地のない天然アスファルトが付着した石器や土器が35点（石鏃25・石錐4・石匙4・剥片1・注口土器1）も出土したこと、北陸～東北地方で出土例が多い石冠が竪穴住居跡から2点出土していること、などです。土器は勿論のこと、そのほかの遺構や遺物についても、同じ時期の本県平野部の遺跡とは大きく異なります。



仲内遺跡

川戸釜八幡遺跡

湯

西

川

遺跡遠景 (西上空から撮影)

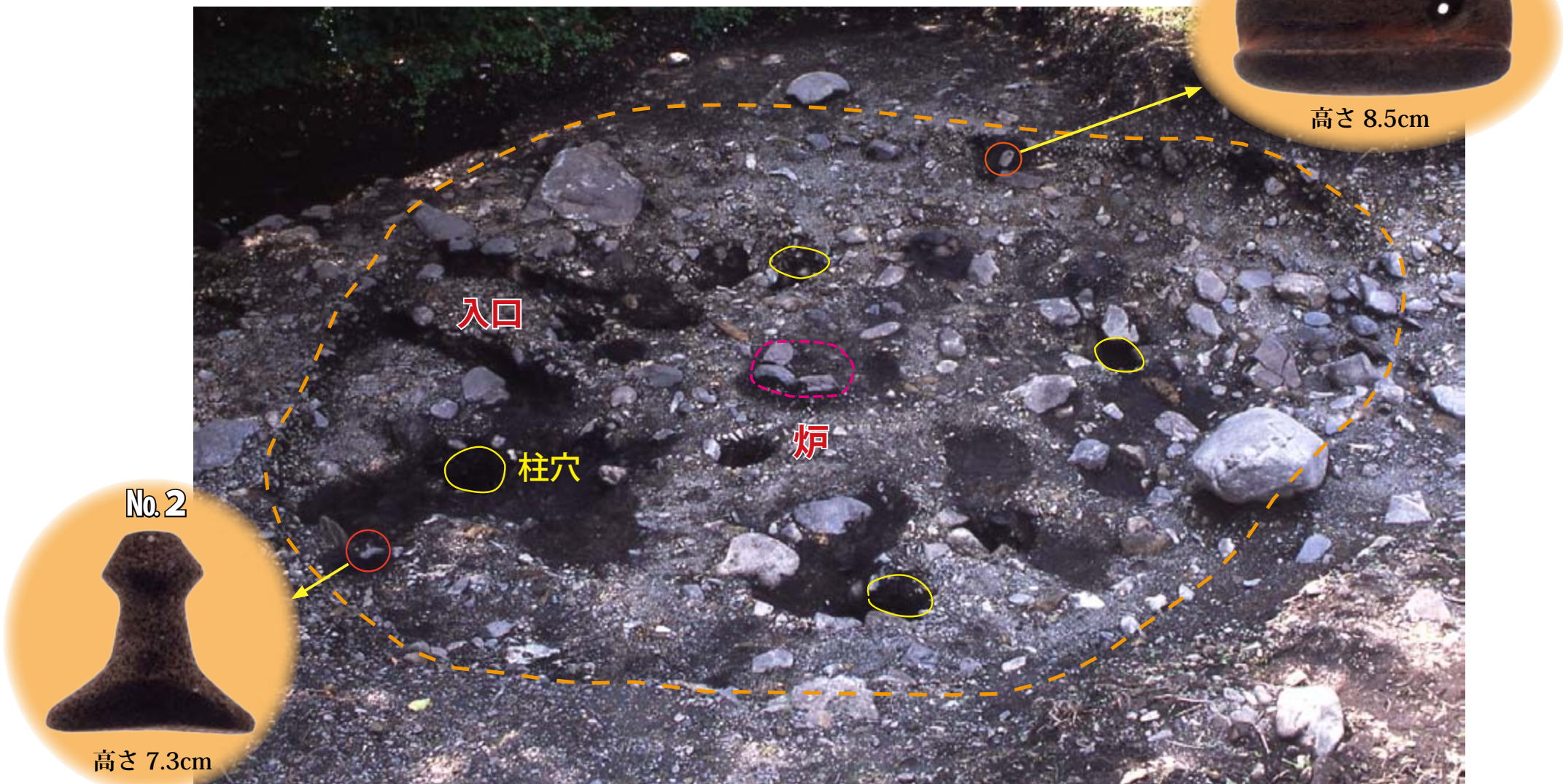


埋葬の様子（推定）



H14 地区石棺墓群（西から撮影）

竪穴住居跡から出土した石冠^{せっかん}



写真（右上 No.1・左下 No.2）の石器は、石冠（せっかん）と呼ばれる縄文時代の晩期（今から 3,000 年前から 2,400 年前）に使われたものです。何に使われたかは様々な説がありますが、縄文時代の「まつり」や「まじない」の道具と考えられています。

この形の異なる 2 点の石冠は、多くの土器や石器とともに竪穴住居跡の壁際から出土しました。右上の石冠 (No.1) には赤と黒い色が塗られています。赤い色はベンガラと呼ばれる顔料で、黒い色は漆です。

日本にもあった「アスファルト」



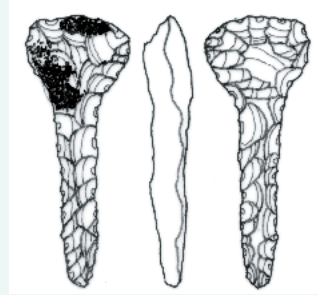
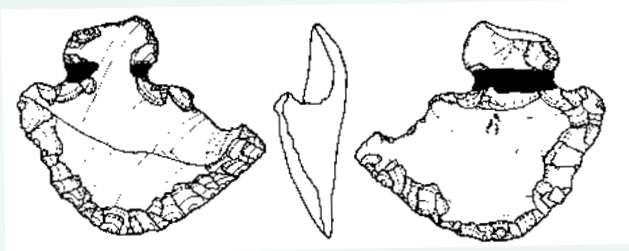
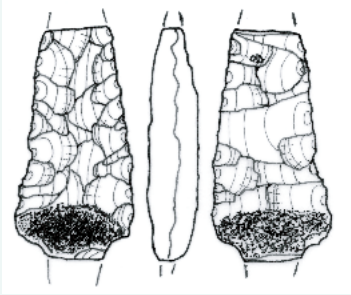
石鎌（やじり）



石匙（小刀のように使う）



石錐（穴をあける）



■ アスファルト付着部分

アスファルトのついた石器

アスファルトとは、原油に含まれる成分の一つです。粘性が強く、常温では固まったままの状態を保つため、道路の舗装などに使われます。日本では秋田県や新潟県などの油田から天然アスファルトが発見されています。

川戸釜八幡遺跡では縄文時代後期から晩期の石鎌・石匙・石錐などに黒色物質が付着していることが観察され、分析の結果、アスファルトであることがわかりました。石鎌の場合は矢柄との接着、石匙・石錐の場合は柄との接着にアスファルトを使用したものと思われます。おそらく、アスファルトを火で暖めて溶かし、接着したいものに塗ったのでしょう。冷えて固まれば強い接着効果を発揮したと思われる。

アスファルトは栃木県では産出しないので、秋田県・新潟県などから、遺跡に持ち込まれたものと思われます。縄文人たちはアスファルトが優れた接着剤であること、そして、それが遠くで採れることもよく知っていたのでしょう。また、アスファルトを手に入れるために、産出地との交流も行われたと思われます。

